古代アメリカ学会第 16 回研究大会発表要旨

－ 調査速報 －

「ペルー北部、インガタンボ遺跡第三次発掘調査」

山本睦（日本学術振興会特別研究員）
ホセ・ルイス・ペーニャ・マルティネス（南フロリダ大学大学院）

インガタンボ遺跡は、エクアドルとの国境に近いペルー北部にあり、アンデス山脈分水嶺から東の熱帯低地に向かって下りた標高約 1,000m の場所に位置する神殿遺跡である。筆者らはこれまでに、当遺跡において 2 シーズン（2006 年と 2007 年）の発掘調査を実施してきた。その結果、形成期からインカ期という長期間にわたる神殿の建設過程や、土器編年、および他地域の神殿遺跡と比した時に顕著となるインガタンボ遺跡の特徴が次第に明らかとなってきた。しかし、現在までに発掘を実施した範囲は遺跡全体のわずか数%にしか満たない。そのため、遺跡の全体像、あるいは神殿建築の細部に関しては、未だ不明なことが多い。また、インガタンボ遺跡では、これまでの調査によって、海水生種の貝製品や黒曜石など、周辺地域や遠隔地との地域間交流を示すデータが出土しており、その議論を精緻化していくためには、更なる調査が必要であることは明白である。
このことから、筆者らは今年の 8 月から 9 月の 1 ヵ月にかけて、インガタンボ遺跡で第三次発掘調査を実施した。本発表では、その概報をこれまでの調査成果、および調査から導き出された課題と関連づけながら報告する。

「ヘケテペケ川中流域第 5 次発掘調査 - テンブラデーラ対岸の神殿遺跡群 - 」

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

発表者は 2003 年よりペルー北部ヘケテペケ川中流域テンブラデーラ村周辺にて、アンデス文明形成期の遺跡を調査してきた。北岸アマカス平原にはモンテグランデやラス・ワカスなど、形成期前期・中期（草創期：Initial Period）の神殿群が多数分布することが知られていたが、第 3 次調査までは主としてそれらを対象として発掘を重ねた。その結果、神殿相互の緊密な関係が明らかになり、それらの総体は「アマカス複合遺跡」と命名された。いっぽう交通の便が悪い南岸は先行研究が少なく知見が限られていたが、モスキート平原にはアマカス複合に先立つ形成期早期（先土器期後期：LatePreceramic Period）の岩絵と神殿が展開し、またやや上流寄りのレチューサス遺跡はアマカス複合の放棄後に成立した形成期後期（前期ホライズン：Early Horizon）の神殿であることなどが、第 4 次調査までに分かってきた。本大会ではそれら南岸遺跡群において、2011 年 9 月に着手した第 5 次調査の成果を速報する。

「ペルー中央海岸、サウメ遺跡の植物利用」

浅見恵理（総合研究大学院大学）

サウメ遺跡はペルー中央海岸北部を流れるチャンカイ川左岸に位置し、標高約 487mの河岸段丘上に広がっている。主な出土土器の様式から、チャンカイ文化（A.D.1000-1470）に属すると考えられる。発表者は 2009 年に発掘調査を行い、以後、遺物整理を行ってきた。

本発表では、サウメ遺跡から出土した植物遺存体に焦点を絞り、種の同定と分析結果について報告する。調査対象は数種類の種子と果実、および土器片に付着した炭化物である。

分析の結果、ほとんどの植物が現在でも遺跡周辺で栽培されており、植生の変化があまりみられないようである。また、完全な形で出土したトウモロコシの形態により、海岸起源のものと山地起源のものが混在していることが明らかとなった。さらに、土器片に付着した炭化物の分析結果から、当時の食糧事情が示唆される。

この他に、サウメ遺跡からはキンチャと称されるアシ等の植物と泥土で構築された壁が検出された。キンチャは中央アンデス地域では古くから用いられている壁の構築技法である。これまでの考古学調査で把握されている多文化のキンチャと比較検討を行い、建築学的な見地から考察を行う。

「先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科動物飼養について」

清家大樹（筑波大学大学院）
鵜澤和宏（東亜大学）

先スペイン期アンデスにおいては、文化史上、汎アンデス一帯に共通の文化的広がりがみられる「ホライズン」と呼ばれる時期が 3 時期存在する。特にペルー北部高地においては、各時期について次のように捉える事が出来る。

・ラクダ科動物の南から北高地への拡散と地域間交流の活発化が起こった形成期
・ワリが到来し、拠点を置こうとしたカハマルカ中期
・インカが到来し、拡大の拠点を置こうとしたカハマルカ晩期

今回私は発掘を行った研究者の方々の協力の下、北部高地の各時期における重要な遺跡の動物骨を調査する機会を得た。形成期においてはパコパンパ遺跡の動物骨を、またカハマルカ期においてはワリ、インカそれぞれの北部高地における拠点の一つであると考えられる各遺跡の動物骨の調査を行うことが出来た。
また、南米ラクダ科動物の野生種には地域的に区分可能な亜種が存在し、それぞれは北から南に行くに従いサイズが大きくなることが分かっている。また、ラクダ科動物は大型種と小型種の 2 種類が存在し、それぞれの利用形態は異なる。以上のことから、ラクダ科動物のサイズを比較することで、それぞれのラクダ科動物の由来や利用形態についての一端を明らかにすることが出来る。

上記 3 つの時期において、ラクダ科動物のサイズはどのように変化したのか、または変化していないのか。そしてそれは何を意味すると考えられるのか。本発表では以上のことを踏まえた本年の調査速報を行う。

「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大（第１次）」

大平秀一（東海大学）
森下壽典（東海大学・早稲田大非常勤講師）

インカは、クスコ領域の民族集団の社会・政治・経済構造を基盤として、広域にわたるアンデス各地の諸社会が密接に関連し合って、国家レベルに発展した社会である。「発見」・「征服」期ならびに初期植民地時代において、インカ国家の拡大をめぐる諸相は文字で書き留められているとはいえ、周知の通り、それらはルネサンス後期に生きたスペイン人の文化的フィルターを経た情報である。文字無き民の歴史の一局面を解明していくためには、先住民が残した唯一の声といってよい考古学的資料を通して地道に検証・確認していくことが求められる。

インカが開拓・拡大を進めていた段階で遺跡と化しているフロンティア領域は、行政センター・神殿・倉庫などの建造物、道、畑、ワカといった諸施設の建設、労働者の配置、

隣接する地方社会との関係性等、同国家の特徴を理解する上で極めて重要な情報が採取できる可能性を秘めている。本報告では、こうした問題／目的意識をもって、2011 年夏季に、エクアドル共和国アスアイ県西端部に位置するラ・ソレダー遺跡において実施した発掘調査の概報を提示する。同遺跡周辺域は、インカが中心地の一つトメバンバを基点として、エクアドル海岸部に向かって開拓・拡大を進めていたフロンティア領域である。

「タスマル遺跡の土製建造物調査」

伊藤伸幸（名古屋大学）
柴田潮音（エル・サルバドル文化庁考古課）

チャルチュアパ遺跡は、エル・サルバドル共和国の東部に位置しており、ラス・ビクトリアス、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区に分かれている。タスマル地区はチャルチュアパ遺跡では、南に位置している。この地区では、ボッグスが 1940 年代と 1950 年代初めに発掘を行った。1947 年には国の歴史記念物として認定されたが、考古学的に明らかになっていない点が多くあった。この曖昧さはこの地区の建造物の発展段階の複雑さにあり、様々な大小の改築や増築が建造物に施されていた。2004-2008 年のタスマル地区調査で得られた成果は、「列柱の神殿」の東に設けた 26 号試掘坑とその拡張区で「埋もれた主神殿」がみつかったことである。また、この建造物と関連して副葬品を伴う埋葬 2 基が出土した。今回は 2011 年 2–4 月に行った「埋もれた主神殿」の調査成果を発表する。調査では、土製建造物の建築段階に関する資料が得られた。

－ 研究発表 －

「歯冠データを用いた先スペイン期ペルー北高地集団の比較」

森田航（京都大学大学院）
長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
関雄二（国立民族学博物館）
井口欣也（埼玉大学）

歯冠は古人骨の系統や生活の復元に重要である。それは、(1) 歯冠は非常に硬質なエナメル質で形成されているため、骨に比べて考古遺跡での遺存が良い。また、(2) 歯冠形態は遺伝性が高いため、集団間の系統関係の復元に有用である。(3) 一度形成されるとリモデリングされることがないため、齲蝕やエナメル質の形成不全といった古病理学データに基づき生活環境を反映しやすい。本研究の目的は、パコパンパ遺跡、クントゥルワシ遺跡出土人骨を中心とした、ペルー北高地の古人骨集団の歯冠を資料とし、形成期の集団間差と、クントゥルワシ遺跡における時代間差を明らかにすることである。今回、歯冠の計測と非計測的形質の観察を行い、多変量解析に基づく系統関係の復元を行った。そして、時代が異なる集団に遺伝的連続性が認められるかを検証した。次に、齲蝕や生前脱落歯、エナメル質減形成を観察し、ペルー北高地の古人骨集団の食性・生業の違いや健康状態に関する考察を行った。

「ムユの民族誌：採取と流通」

大平秀一（東海大学）

ムユ（スポンディルス／ウミギク）は、貝殻の外面全体と内面の縁部分が赤色系・紫色系を呈し、外面にトゲ状の突起が認められる二枚貝である。中央アンデス地域の先住民社会において、遅くとも紀元前 2000 年頃にはこの貝に儀礼的意味合いが付与され、以後現

代にいたるまで必要不可欠の供物／儀礼品の一つとして重要な役割を担ってきた。
その生息域は、赤道海流の影響下にある温暖な海域に限定される一方で、出土地はチリやアルゼンチンにいたるアンデス全域､そしてアマゾン領域にまで及んでいる｡このため、文字をもたない先住民社会・文化の動態をめぐるアンデス先史学の議論において、ムユは頻繁に取り上げられてきた。その議論は、この貝の生息域・採取地がエクアドルのサランゴ周辺域であるという前提で展開されてきたといってよい。
本発表では、ムユの採取と流通に関する民族誌調査のデータを提示し、この議論のあり方に再考を求めたい。

「いわゆるウスルタン様式土器の製作技法の検討 」

村野正景(京都文化博物館)

いわゆるウスルタン様式土器は、オレンジ色の地色に、やや明るい色の線状文様が「ネガティブ」に施されることを特徴とする。本土器は、北はメキシコ、南はコスタリカまで出土がみられる広域分布土器である。そのため、当時の土器の生産や流通、それに関わる人々の社会組織や地域間関係を、広域的に把握できる潜在力をもっている。また存続時期は、中米の先古典期後期から古典期前期に比定される。この時期は、低地マヤ社会の変化を解明する上で重要な時期であるため､当該土器は古くから重要な研究対象となってきた。とくに近年では、理化学的手法をもちいた胎土分析などによって、多くの知見がえられつつある。
ただしこれまでの研究は、誤解を恐れずに言えば､「形」や「原料」の研究であった。しかし、土器のもつ属性はそれらに限らない。土器の情報をさらに引き出す必要があり、とりわけ当時の土器生産と流通の状況をより深く知るためには､「どのように作られたのか」を検討することによって得られる情報も重要なものとなろう。
製作技法については、1927 年に Lothrop 氏が言及して以来、多数の仮説が提出されてきている。しかし、これまで解明にはいたっていない。そこで本研究は、当該土器の製作技法を明らかにすることを試みた。

「マヤ文明の盛衰と環境変動」

青山和夫（茨城大学）

マヤ文明のセイバル遺跡の層位的発掘調査および出土遺物の分析を行い､2000 年にわたるマヤ文明の盛衰について検証した。その結果、(1) 2 世紀頃、マヤ低地南部の一部の大都市が衰退したが、セイバルは繁栄し続けた、(2) セイバルは 5 世紀頃に一時的に衰退した後、7～9 世紀に 2 回目の繁栄期を迎えた、(3) 9 世紀頃、マヤ低地南部の多くの都市が衰退する一方で、セイバルは繁栄したが、究極的に 10 世紀に衰退した、という通時的変化を確認した。さらにセイバルのマヤ文明は、従来の学説よりも数百年早く、先古典期中期の前半のシェ期初頭(前 1000 年頃)に起源することが明らかになった｡シェ期には､土器、公共広場や大建造物を建設・更新する文化的景観と観念体系、グアテマラ高地産翡翠製石斧・装飾品の遠距離交換網への参加、グアテマラ高地産黒曜石製石刃核の流通と石刃の生産を可能にする複雑な社会が確立されていた。そして先古典期中期のトウモロコシ農耕を基盤とする定住生活の開始に伴って、王権が形成されたことがわかってきた。また、セイバル遺跡付近の湖沼のボーリング調査によって、マヤ低地で初の年縞を含む極めて良好な湖沼堆積物試料の採取に成功した。マヤ文明の盛衰と環境変動の因果関係を検証する見通しがついた。

－ ポスターセッション －

「メソアメリカにおける先スペイン期土器製塩に関する基礎的研究」

市川彰(名古屋大学大学院)
松崎大嗣（東海大学文学部歴史学科）
八木宏明（滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科）

メソアメリカ地域の沿岸部社会の特質を明らかにするために 2007 年よりエルサルバドル共和国レンパ川下流域に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査がおこなわれてきた。本発表では、2011 年におこなったヌエバ・エスペランサ遺跡発掘調査と土器分析の成果に基づき、特にメソアメリカにおける先スペイン期土器製塩の実態について考察する。塩は人体にとって重要な資源であり、メソアメリカ考古学ではこれまで民族学や考古学から研究されてきた。しかし、エルサルバドル太平洋岸では先スペイン期の製塩活動の存在は指摘されつつも考古学的な検証は十分に行われていない。

イロパンゴ白色火山灰層下の遺物包含層の発掘の結果、硬化面、壁面と底面が丁寧に仕上げられた土器埋納遺構、焼土層、焼土片などが検出された。また、出土遺物の約 90%を占める粗製土器片の分析と他地域との比較からは、いわゆる「製塩土器」といわれる土器の諸属性が認められる。ことのことら、少なくともイロパンゴ火山噴火以前（紀元後 400 年頃）にはヌエバ・エスペランサ遺跡およびその周辺で土器製塩活動がおこなわれていたことが想定される。

「デジタル三次元地図を用いた建築復元と解釈」

福原弘識（国立民族学博物館外来研究員）

これまで発表者はメキシコのテオティワカン遺跡において作成したデジタル三次元地図を用いて建築物の研究を行ってきた。この地図は、現地における遺構の測量調査を基盤として､測量調査では得られなかった情報を発掘調査記録から補って過去の建築物を復元し、完成させたものである。本発表ではこの地図の中でも、庶民が日常生活を営んだアパートメント･コンパウンドと呼ばれる建築複合を対象としてデジタル三次元地図の分析を行う。分析では特に建築物の形状と空間利用について焦点を当て、その時代ごとにみられる改築プロセスを明らかにする。郊外のアパートメント・コンパウンドは単なる住居と言う側面以外に、工芸品生産や政治、儀礼など生活の中の様々な活動を行う場であり、そうした活動の場は複雑に重なりあって存在した。その区画自体は都市の街割りの中で限定されており、改変の多くは拡大や移動によるのではなく、区画の内部において時代ごとの必要性により縮小と拡大が行われた。この改築のプロセスを通して、人々がどのような建築物を必要としたのか、建築物の形状と空間利用の指向性の変化がどのような社会的背景を反映しているのかについて議論を行う。